



三重大学医学部・講師  
阪井田 博司 Sakaida Hiroshi  
【URL】 <http://www.medic.mie-u.ac.jp/neurosurgery/index.html>



“切らずに治す”という治療方法

●血管内手術!?

実験や研究では上手くいくのに、実際の臨床でなかなか良い結果につながらない医療が多いなかで、この聞き慣れない治療法は着実に発展をとげ、日進月歩といわれる現代医療の代表選手になっています。“切って治す”ことが簡単にできない病気でも、細いカテーテルという管を体に入れて“切らずに治す”という治療方法です。

●血管内治療センター

三重大学医学部は血管内治療を早くから取り入れ、脳・心臓・大動脈などの病気を治療してきました。2003年5月には脳神経外科・循環器内科・

心臓血管外科・放射線科などが集まって、血管内治療センターを設立しました。様々な分野の知識や経験を統合して、より良い先進医療を行うためのセンターです。“大学病院の高度先端医療”と聞くと「何だか怖い」というイメージを持たれる人が多いと思いますが、実は“より痛くない楽な治療”を行うことを目的にしています。血管内治療センターの診療科は緊急手術を受け持つことが多く、救急車で運ばれた患者さんをより迅速に治療するために、三重大学附属病院の救急部(テレビで注目されている“ER”です)とも深く関係しています。

体に優しい高度先進医療  
脳卒中最前線

頸動脈 狭窄症に対するステント併用血管拡張術



頸部内頸動脈という重要な血管は、コレステロールなどのゴミが血管の中に溜まって細くなることが多い場所です。脳梗塞の原因となることが多く、



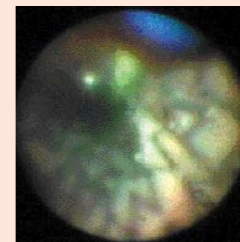
従来通りの手術的治療ができない条件の患者さんも少なくありません。バルーンカテーテル(風船付きカテーテル)とステント使って、血管の中から



広げる“ステント併用血管拡張術”は、高齢の方や他にも病気を持っている患者さんに有効な治療方法です。

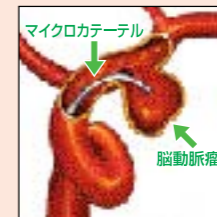


【自己拡張型ステント】一定の太さに広がる形状記憶合金の網状の筒で、細いカテーテルに納められたステントを出す、血管の中から細くなった部分を押し広げます。バルーンカテーテルの力も借りて、詰まりそうになった血管も元の太さに戻すことが出来ます。

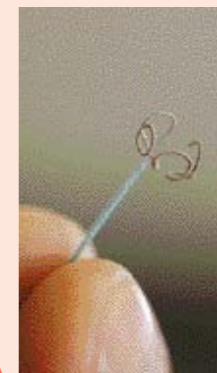


【血管内視鏡】実用化されている0.75mmという極細のファイバースコープを用いて、ステント併用血管拡張術を行った後を観察した様子です。ステントが細くなった血管の中から押し広げています。

脳動脈瘤コイル塞栓術



脳動脈の壁が弱くなって膨らんだコブ(瘤)が破裂すると、死亡率の高いクモ膜下出血を発生します。従来の開頭術で治療が困難な場合でも、動脈瘤の中までマイクロカテーテルを誘導して、コイルを詰めていきます。破裂する前に発見された動脈瘤も、クモ膜下出血を予防するために同様に治療することができます。



▲▲プラチナ(白金)製の柔らかいコイルがワイヤーに接続され、放射線透視下にマイクロカテーテルの中から脳動脈瘤などの病変に挿入します。適切な位置におさめ、電気的あるいは機械的にコイルを離脱して留置します。病気の形や大きさに合わせて、100種類以上のコイルを組み合わせて使い分けれます。



▲▲プラチナ(白金)製の柔らかいコイルがワイヤーに接続され、放射線透視下にマイクロカテーテルの中から脳動脈瘤などの病変に挿入します。適切な位置におさめ、電気的あるいは機械的にコイルを離脱して留置します。病気の形や大きさに合わせて、100種類以上のコイルを組み合わせて使い分けれます。

視鏡(極細の胃カメラのようなもの)や超音波検査などは既に実用化されています。マイクロマシーンやインテリジェントカテーテルの開発とともに、「ミクロの決死闘\*」が夢物語ではない時代が直ぐそこまで来ています。

\*【ミクロの決死闘】 縮小された人間が潜水艇に乗って患者の体内に入り、患部を治療する映画

三重大学医学部・教授  
日本脳神経血管内治療学会  
・運営委員  
・総務委員会委員長  
・専門医指導医認定委員会委員長

Taki Waro 滝 和郎

日本における脳神経血管内治療の第一人者。脳神経血管内治療は、専門性が高く高度な技術と知識を必要とするため、日本脳神経血管内治療学会に専門医・指導医認定委員会を設け、その委員長を務めている。

